

砺波・常福寺の阿弥陀如来立像をめぐって

杉崎 貴英(京都造形芸術大学)

常福寺(富山県砺波市大窪、浄土真宗東本願寺派)に本尊として安置される木造阿弥陀如来立像(重文、像高79.4センチ、以下本像と略す)は、早く大正13年(1924)に旧国宝に指定された周知の作品である。一見して、快慶様式を踏襲した安阿弥様阿弥陀如来立像の遺品であることが了解されるが、その視点からの言及は意外にもほとんどなかった。現状、銘記・納入品ともに確認されない本像であるが、本発表では安阿弥様阿弥陀如来立像の作例群中における位置を考察し、その上で制作環境の推測を試みたい。

目尻を吊り上げ、口角を引き締める意志的な表情、肉身の起伏をトレースしつつ衣文を整齊した着衣表現に快慶様式を承けた表現が看取される。そして量感を減じた、めりはりを強調しない肉身表現や、着衣形式が山本勉氏の定義された第三形式に属する点は、快慶晩年の段階と対応するものである。第三形式の快慶作品のうち、表現上本像に最も近いのは、承久3年(1221)頃の和歌山・光台院像であろう。一方、同年の銘をもつ光林寺像や無銘の三重・遍照寺像などに見られるような、衣端の変化や衣文の分岐に凝るといった着衣表現のバリエーションはほとんど見出せない。本像は面貌などから快慶自身の作とは見なしがたく、建暦2年(1212)の滋賀・玉桂寺像(行快作か)を現存初例とする第三形式のうち、比較的初期の段階を踏襲した周辺仏師の作品として把握できよう。

常福寺の寺史は近世を遡らないようで、本像の伝来については、かつて近在の増山城下の久遠寺の本尊であったとする寺伝があるにとどまる。しかし地域史と彫刻史の成果を統合することにより、制作環境の展望が、中世前期の越中にひらけてくるように思う。まず快慶工房と越中を結ぶ線として注目したいのが、法然の一周忌を期して造立された玉桂寺像の納入品の一つ「越中国百万遍勤修人名」である。すでに地域史の視点から久保尚文氏が着目され、交名中に複数見える射水氏・利波氏・三嶋氏の名は古代以来の越中の氏族の、宮道氏・清原氏の名は越中国衙の在庁官人の系譜に連なる人物と説かれた。そして仏教史の伊藤唯真氏の論をうけつつ、法然 葉室家(勸修寺流藤原氏、遥任国司) 宮道氏(在庁官人)という人的関係に、越中における初期浄土宗帰依者急増の背景を求められたのである。彫刻史の立場からこの指摘に接する時、三宅久雄氏が提唱され、青木淳氏が解明を進められた、初期浄土宗と快慶工房との関係が想起されよう。着衣表現などから本像に先行すると判断される玉桂寺像はその象徴的遺品といえ、現存遺品では建久五年(1194)の納入品をもつ遣迎院阿弥陀像に起点が求められている。遣迎院像への葉室家一門の結縁も青木氏により指摘された。中世前期の越中・快慶工房・初期浄土宗の三者を結ぶこうした相関のうちに、本像の制作環境を考えてみたい。